

陸前高田市ボランティア活動報告レポート

2011 年 12 月 9 日（金）から 11 日（日）、信州豊南短期大学生 8 名（男子 2 名・女子 6 名・計 8 名）が長野駅発陸前高田行きボランティアバスに参加した。

1. 参加目的

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災後、信州豊南短期大学では被災地への支援を物資寄付や募金を通して続けている。ゼミにおいても、「情報支援」をテーマとして、復興にむけた支援について、各情報ツールを使用しながら、また、物資支援等も行いながら、支援の方法、手段、ありかた等を勉強している。そのなかで、今回のボランティアバス参加において、以下について、目的とした。

- ① 復興を願いボランティア活動をする人たちの参加理由、参加目的、どのような想いがあるのかを聞くこと
- ② ボランティアバスに参加する前に知り合っている仮設住宅、大船渡保育園の方々に、手作りのポケットティッシュケースを渡しに行き、被災者の方に元気になってくださいという思いを伝え、復興作業と共に、心の面でも出来る範囲でお役に立ちたい
- ③ 震災後、ボランティアバス参加する前に、被災地に実際に行った本学生 3 名、および、インターネット、新聞、テレビ等から被災地の情報は入手していたが、被災地を実際に見てみたい
- ④ ボランティアバスでの活動がどのような事を行うのか、実際に体験してみたかった
- ⑤ 社会に出る上での経験として何らかの形で活かしていきたい

2. ボランティアバスについて

今回参加したボランティアバス「手を貸すぜ 東北」信州号は、長野市在住の高井由香子さんがボランティアバス「レーベン号」に 2 回参加し、地元長野から東北へのバスを出せないかと、個人の想いで企画したものである。

下記の理由より、実績と信用性の高いものと判断し、ホームページから参加登録をした。
（ただし、実績、信用性については後述を参照の事）

※なぜ信州号を選んで参加したか

- 長野発、参加費用が¥10,000 からスタートし、人数が増えると、最低¥4,200 になるということで、学生が大勢集まって参加すると安価で参加できる
- 信州号は、株式会社レーベンコーポレーションが筑波から毎週出しているボランティアバス「レーベン号」を参考にしたと聞いた

※以前ゼミ生のひとりが東北へ行った際にレーベン号のことを聞き、実際にお会いしている

4. 日程

【9日】

長野 IC から高速に乗り、岩手県一関 IC から一般道へ。

21 時 00 分：長野駅東口ロータリー発、学生 5 名乗車

22 時 40 分：佐久 SA にて学生 3 名乗車

【10日】

07 時 00 分：コンビニに立ち寄り朝食を各自購入、朝食とりながら車内で自己紹介

08 時 30 分：陸前高田市ボランティアセンター到着、レーベン号と合流。ボランティア受付着替え、VC 職員による作業の諸注意を聴く（注意事項の記した紙も職員より配布）。ボランティアセンターより借りた道具の積み込み

10 時 00 分：作業場所へ移動

10 時 30 分：作業場所（陸前高田市広田町六ヶ浦会館付近の漁港）到着

10 時 50 分：作業開始

【作業内容】

側溝に詰まった土砂の撤去作業。バールで側溝の蓋を外し中の土砂をスコップで掘り出し、石、瓦礫、ビニール等に仕分け、一輪車・バケツ等を使い、土砂、瓦礫を運び出す作業。総勢約 80 人のボランティア（信州号＋レーベン号 2 号車）で 300~400m の側溝の土砂の撤去作業を行った。

12 時 00 分：昼食（お弁当支給）

13 時 00 分：作業再開

14 時 15 分：片づけ

14 時 30 分：作業終了

15 時 10 分：ボランティアセンター着

使用した道具を洗って返却。前日までに連絡をしていた個人支援者の方に、ボランティアセンターに来ていただき、ポケットティッシュケースを渡した。

15 時 45 分：ボランティアセンター発

15 時 55 分：陸前高田市の現地直売所「採れたてランド高田松原」着 自由行動

16 時 10 分：「採れたてランド高田松原」発

17 時 00 分：「気仙沼プラザホテル」、「お魚市場」着

（プラザホテルにて入浴（出発時に、入浴代 500 円は別途徴収）

入浴、夕食、お買い物など（プラザホテルにて希望者は入浴可）

20 時 00 分：バス集合。気仙沼発。車内で感想タイム。

一関 IC から高速に乗り、帰宅

【11日】

6時00分：長野着 解散

3. 目的の成否

- ① ・就職活動で忙しかったので、気になっていたが何も支援という形がとれなかったが、今回、WEBより情報を知り、参加した（大学生）
- ・レーベン号で高井さんを知り、企画に賛同され参加（長野県内外）
 - ・中越沖地震で被災され、お礼と何かしたいという気持ちから（新潟より）
 - ・参加する度に痩せる、健康的なので
 - ・阪神大震災の時、おばあ様が被災され、その時自分は何もできなかった（男性）
 - ・ボランティアは初めてであるが、友人に誘われたので
- など

年代は18歳～70歳近く 幅広い年代 男女比率は50%

- ② ゼミ生内で、各人の考え方や行動が、連絡不足のため、何をしているかまったく知らなかったため、仮設住宅の方、大船渡保育園の方に、直接渡すことはできなかった。結果、現地で支援活動を行っている方に、ボランティアセンターまで来ていたく事となり、後日大船渡保育園へ届けていただくよう依頼する事となった。
- ※1人の学生は、現地ですぐに移動できるように、タクシー会社の連絡先を調べるなどの準備をしており、1人の学生は現地の方にポケットティッシュケースを託し、仮設住宅の分を後から郵送するつもりでいた。

- ③ 被災地を見てまず、「ふざけんな」という一言が浮かんた。
- （積まれた瓦礫は全部人がもともと住んでいたところで、ここでは、もう、人が住んでいくことができないという怒り、悲しみが爆発した）
- バスの中から見た風景や、作業場所の様子からは、まだまだ復興がなされていない被災地の現状が見てとれた。
- 今までメディアや人から聞いた話などからは、「かわいそう」という程度の気持ちであったが、現地に行き、本当に津波があったのだ、という事実をあらためて実感した。
- マスメディアやネットからでは計り知れない、想像をぜっする被害状況を目のあたりにして、直接見る事と、情報として知る事は大きな違いがある事を実感した。
- 復興までは、まだまだやらなければならないことは途方もなくあるように見えた。そして、多くの人力も必要であると感じた。
- ④ 以前からボランティアバスを利用している方、今回はじめて参加の方などのお話をお聞きしたことは、様々な考え、想いに触れる貴重な機会となった。ボランティアに限らず、何か行動しなければならないと思った時、そのきっかけとなる指標のような存在が身近にあった事は、貴重な経験となった。

今回、高井さんが個人的な思いからボランティアバスを企画したように、動き出すきっかけになることを、参加者の話を聞き学ぶことができた。

(実際のボランティア作業についての感想は、後述)

- ⑤ 一人の学生は、就職試験の際、「震災と私」というテーマでの筆記試験がでた。当時は、漠然とした思いであったが、来春入社後、今回のボランティアに参加した事を何等かの形にて企業に活かしたいと思った。(長野県内)
- 一人の学生は、企業採用の際、東海沖地震への防災についての話題がでた。今回のボランティア参加にて、意識・作業など勉強するものが多くあった。(岐阜県)
- ボランティア企画の大切さ、難しさ、などを勉強できた。
- ボランティア作業に参加することは、とてもよい経験となった。

5. 感想

▽すばらしいと思ったこと

- “長野県から学生が参加できる金額でボランティアバスが出た”ということ。
いままで長野県内からのボランティアバスは、2万円以上であったので、なかなか学生は参加できる金額ではなかった。
- 参加者が老若男女問わず、また、ボランティアが初めての方々や、各地方からも参加していたこと。
- 作業道具不足を懸念し、シャベル等を持参している人がいたこと。
- 初参加者の方も慣れない作業の中、コミュニケーションをとり手際よく作業を進めていたこと。

▽思ったこと・反省

- ボランティアバスに申し込みをする際、連絡先の情報がフリーアドレスのみで、電話番号等が書かれていなかったことに疑問を抱かず、申し込み、入金してしまった。
ボランティア詐欺の可能性を全く考えていなかった。
- 長野出発前の高井さんとのメール交換の際、前日のレーベン号責任者様方のご検討の結果、団体行動と時間厳守のため、バスで陸前高田の仮設住宅へ立ち寄ることはできないが、休み時間をつかって自己完結で動く許可をもらった。しかし、参加した学生内での情報の共有ができていなかったため、動くことができず、結果として周りに迷惑をかけてしまった。(他人任せが各自にあった)
学生が現地で自由に動ける時間もあった。1人の学生が計画していたタクシーで直接届けることも可能であったが、臨機応変の行動もとれなかった。
自分達の計画性のなさを一因とし、高井さん、ケースを預けた方にご迷惑をおかけし、仮設住宅で会いたいと言ってくださっていた方の心を傷つける結果となってしまった。

▽疑問に思ったこと

- 参加者の昼食のお弁当の残飯が多かった。残したり捨てたりすることに抵抗がないのか疑問であった。
- 事前にホームページやメールで告知のあった持ち物なのにも関わらず、インソールなどを持参してこなかった方もいた。
- 当日まで作業内容がわからなかった。

陸前高田ボランティアセンターは団体の場合電話受付が可能である。活動予定日前日に翌日受付を済まし、作業委託を受けていれば、時間的ロスも少なく、到着後即座に作業に移れたのではないか。遠方からのボランティアは長時間の移動となるため、実際の活動時間を考えると、効率が悪いように感じた。

- ボランティアセンターで配られた作業の注意点の紙は、ボランティアバスが東北へ行く前に知らせておくべき情報だったのではないか。(破傷風の注意、詳しい持ち物などゼミでは、他のボランティア団体が持ち物としてホームページで公開している情報を事前に見、参考にして準備を進めた)
- バス内での参加者へ伝える情報が少なかった。何時までここにいて、何時から移動する次にどこへ移動するなどの情報が少なく、それらを伝えるタイミングが悪かったように感じた。
- 作業時間が短縮された際に、理由の説明が一切なかったこと。
- 信州号参加応募のページは名前とフリーメールしか記載されていない不明瞭なフォームだった。事前に参加者へ知らせる情報量の不足を感じた。
- 参加前日までの、他のボランティアの方々による復興支援状況、自分達の後に来られるボランティアの方々への引き継ぎ事項等の時間も、ボランティアセンターで設けてほしかった。私たちも、活動に対して、より多くの情報を得ようとする姿勢が薄かったが企画する側、参加する側が双方情報を明確にし、協力して復興支援する必要性を感じた。
- 実質的な責任者が不明であったこと。今回の信州号はレーベンと合流し、レーベンの指示によって作業した。しかし、あくまで主催は高井さんであるとのこと。主催者は誰か？高井さん、副リーダーの方々も、誰が責任者であるのか把握していたのか疑問を抱いた。
- 当日地震があり、現地のボランティア活動をされている方は、ラジオをたえずつけ、情報を得ていた。しかし、参加者は誰も（少なくとも私たち学生は）地震があった事も知らなかった。実際に津波のあった地域での作業に対し、危機管理についてどのような意識をもっているのか疑問に感じた。
- 参加したのが土曜日であったにも関わらず、地元の方々の、同じような瓦礫撤去作業をしている姿を見受けられなかった。遠方からボランティアに参加する場合、移動時間が長く土地にも不慣れであるため、非効率であり作業の限界が見える。もし、地元の方と一緒に瓦礫撤去などの作業が行われたならば、より効率的な作業ができたと思う。
(実際に、作業場所へのバス移動で、バスが迷った)

“地元の方のサポートをする”という形が理想的だと思う。今回の経験でボランティアはコミュニケーションの場にもなることが分かり、心の面でのサポートにもなるのではと感じた。

※備考 今回ボランティア不参加の東北出身の学生の考え

「地震への意識は、メディアで流される情報量の低下や現地の知人とのコミュニケーションにより、下降の一途をたどっていると聞いているし、東北出身の私にとっても、直接家族・親戚が被害をうけていないので、ボランティア意識は低かった事と、自身の個人的な理由により、参加しなかった。

地震発生時、親族・知人の安否の行方が最も早く知りたい情報であった。それが解決され、自分の知る範囲においては日常生活が震災前に戻りつつある今、被災地に行き瓦礫撤去をすることだけがボランティア活動ではないと思う。作業も大切だが、現地には、お金が必要である。義援金を送ることも支援の重要な形だと思っている。

これからも、授業の一環として、もしくは個人で支援を続けていく上で、震災当初に比べれば、復興支援意識は低下しているが、それは、復興へ向かっている現実があるからだとも思っている。東北出身者として、自分が被災地復興へ出来ることを、遠い長野から行っていきたい。」

※この学生は震災直後より、学内全校生徒に呼びかけ、日本赤十字社への募金活動を行っていた。

今回のボランティアへの参加は、私たち参加者、参加しなかった学生たちも、授業を通しての支援活動の状況把握からは見えない点、考えなかった点を知る、学びの場として意義ある参加だった。荒れ果てた現地の現状は、メディアからの情報だけでは想像できないものであった。今後の情報支援の勉強としても、大きなすばらしい経験をさせて頂いた事に感謝したい。支援活動については、個人の意見を尊重したい。